

接触場面でのコミュニケーション調整とそのディスコース パターン：自己マーク自己調整を中心として

宮崎里司

【キーワード】

調整パターン、自己マーク自己調整、不適切マーカ、自己調整ストラテジー、
ディスコース習得

1. はじめに

1980年代以降、Krashen や Long に代表される第二言語習得研究は、「理解可能なインプット」(comprehensible input) をキーワードにして意味交渉研究 (negotiation of meaning) (Varonis and Gass 1985) の分野で発展してきた。しかしながら、こうした研究では、接触場面で、規範からの逸脱によるコミュニケーション問題 (または、不適切さ *inadequacy*) が起きた場合、ディスコースの中でどのような調整パターンが現れるかについての考察が不十分であった。また、この調整パターンを習得の対象として捉えることについても関心が低かった。たとえば、Long はインターアクション仮説の中で、調整と習得とを関連付けようと試みている (Long 1983) が、彼の理論の中では、調整は単に理解可能なインプットの過程で現れるとみているだけで、習得に不可欠な要素として注目していない (Miyazaki 1997, 宮崎 1998)。今後は、接触場面のディスコースの中で、どのような調整パターンが現れるかについて検証し、習得研究とどのように結びつくのかを考察する必要がある。

本稿は、まず外国人日本語学習者 (以下 FS) と日本語ネイティブスピーカー (以下 NS) の会話の中で、不適切な問題を処理するための調整モデルの基本型を、調整軌道というメカニズムの中で提示する。次に、その中で特に自己マーク自己調整に焦点を当てながら、収集されたデータをもとに不適切マーカと自己調整ストラテジーを検証する。さらに日本語習得のために、調整ディスコースをどのように習得していくかについて考察する

2. 調整軌道

調整軌道 (adjustment trajectories) とは、エスノメソドロジーの会話分析派 (Schegloff et al. 1977) によって提唱された概念であり、会話のディスコースの中で不適切な問題が起こった場合、それを処理する過程で現れる連続した調整

パターンを指す。Jefferson (1972) は、この連続性 (sequence) が会話の中心的なディスコース (main sequence) から逸脱した、"side sequence"の中で起きるものだと提唱した。この side sequence の概念は、第二言語習得研究にも応用され、Varonis and Gass (1985)は、会話の参加者がディスコースを維持するための必要な流れであるとした¹。

この調整軌道のバリエーションは、調整過程で参加者がどのような役割分担 (誰が問題をマークし、調整するのか) によって決まり、調整行動を行う参加者のタイプによって、自己調整タイプと他者調整タイプに分類されている。自己調整タイプには、聞き手 (他者) が理解 (comprehension) の過程で不適切さをマークし、話し手自身 (自己) が調整をデザインする、「他者マーク自己調整 (other-marked self-adjustment)」型と、話し手自身が不適切さをマークし調整のデザインをする、「自己マーク自己調整 (self-marked self-adjustment)」型の2つがある。一方他者調整タイプは、話し手による発話の表出 (production) の過程で行われる調整であるが、このタイプには、話し手が不適切さをマークし、聞き手に調整を依頼する、「自己マーク他者調整 (self-marked other-adjustment)」型と、話し手が調整行動に参加せず、聞き手が調整のプロセスを管理する、「他者マーク他者調整 (other-marked other-adjustment)」型がある²。

このように、side-sequence のメカニズムは、構成要素によっていろいろなバリエーションが現れることがわかったが、そのほかに、調整行動の連続性 (調整フレーム) と参加者の構成 (参加者ネットワーク) によっても変化する。例えば、基本的な参加者の構成要員は、発話者 (自己) と聞き手 (他者) であるが、自己調整の場合には、調整は話し手一人によって管理され、また、3人以上が調整過程に参加する他者調整 (教室場面やミーティングなど) も考えられる。本稿ではこのうち、自己調整タイプについて詳しく検証する。

3. 自己マーク自己調整の先行研究

自己調整タイプのバリエーションの一つである、自己マーク自己調整の特徴としては、(1) 一人の話し手がすべての調整のプロセスを管理し、(2) その調整のプロセスは、同じ発話のターンの中で行われることなどが挙げられる。これまでの自己マーク自己調整に関する先行研究は、自己調整の効果、他者調

¹ Day et al.(1984)は、こうした連続した調整は、main sequence と adjustment sequence とから構成されていると説明している。

² 調整軌道のバリエーションについては、Miyazaki (1998) 及び宮崎 (近刊) に詳しい。

整に対する自己調整の優位、そして自己調整過程で現れる不適切さという3つの項目について研究されてきた。Jernudd and Thuan (1983) は、自己調整の効果について、ネウストプニーの理論を応用し、発話者によって意識的または、無意識的に認識されるものだとしている。意識的な自己調整としては、発話者による、会話のある部分についての反省として現れ、一方無意識的なものは、母語話者との自然な会話場面で観察できると説明している。

次に自己調整の優位について、エスノメソドロジストは、自己調整のフレームワークを提唱し、自己調整は、他者調整よりも社会構造上、好んで使われることを明らかにした (Schegloff et. al 1977)。また、Juvonen (1989) は、自己調整の使用頻度が他者調整より高いという作業仮説を立て、スウェーデンの女性教師とフィンランドの移民の少女の教育およびそれ以外の活動で収集された2人の間の会話データを分析した結果、調整パターンはどのような活動をするかによって決まり、教育活動以外での会話は、自己調整が優位に現れることを立証した。この点については、Kasper (1985) も、自己調整は、他者調整ほど他の参加者のディスコースを中断しないので、優先度は高いのではないかと指摘している。しかしながら、ネウストプニー (1995) は、調整行動はそれぞれの文化コードによって異なるので、自己、他者調整でどちらが優先度が高いかは一概には決められないと反論している。

自己調整の先行研究の特徴として、最後に挙げられるのは、不適切さが、調整過程の中でどのように取り除かれるかという問題である。例えば Green and Hecht (1993) は、12歳から19歳までの232人の学生の自己調整を検証した結果、ディスコース全体の不適切さを減らす働きがあることを明らかにした。この研究の中で、自己調整は形態的(または語形的)な問題(morphological inadequacy)が起こるところで、もっとも多く観察され、かつ効果的であることを解明した。さらに、自己調整の頻度数とコミュニケーション問題の発生率は反比例することも明らかになった。はじめの点は、自己調整は形態のルールの逸脱の場合に直接機能するという見解(Krashen 1982: 105)に似ており、次の点は、とくにセルフ・モニターのように、学習ストラテジーの中で中核となる効果的なストラテジーの使用は、より効果的な学習につながる(Chamot and Kupper 1989:21)という理論と共通している。

以上、これまでの自己調整ディスコースの研究で注目されてきた検証項目について概観してきたが、これらの先行研究では、自己調整のディスコース自体、とくに、自己調整の過程で不適切さがどのようにマークされ、それを取り除くためにどのような調整行動がとられるのかについては、依然として、十分な実

証研究が行われているわけではない。自己調整のディスコース上の特徴として、これまでは、問題がどこにあるかというソースの問題、その問題のマーク、それに調整といった要素から構成されているといわれてきた (Levelt 1983) が、他者調整とは異なり、発話交換が起きる事象関連場 (transition-relevance place Schegloff et. al. 1977) でのターンが行われず (発話者が引き続き発話を続ける) ので、自己調整の構成要素の出現は明確に認識できない。このことが「隠れた自己調整 (covert self-correction) を事前にモニターするのを困難にしている」 (Green and Hecht 1993: 152)。Schwartz は、「発話者は、他の参加者とともに、はっきりと調整過程を認識しているわけではないので、自己調整は、交渉のためのインターアクションの中で、おそらく最も困難な認知カテゴリーであろう。」 (Schwartz 1980:141) と述べている。しかしながら、こうした検証の難しさはあるが、不適切さが自己調整過程の中で、どのようにマークされ、調整していくかという構造の解明はモデルとなる調整ディスコースの習得を考える上で不可欠である。

本稿では、ディスコース・マーカ (discourse markers) (Schiffrin 1987)、エディティング・ターム (editing terms) (Levelt 1983) という要素を応用し、日本語学習者と母語話者が自身の発話のディスコースの中で、不適切さがどのようにマークされるかについて検証する。この二つの要素は、これまでの実証研究の中で、あまり注目されてこなかったが、自己調整の構造を解明する上で有効な手段である。

4. データ収集

接触場面での自己調整過程を調べるため、18歳から38歳までの65人のFS (女性55人、男性10人) と、20歳から50歳までの33人のNS (女性22人、男性11人) を被験者に、さまざまなタスク (日本語クラスでのピジターセッション、日本人家庭でのインタビュー、インタビュー試験など) をさせて収集した。録音及び録画データ (総録音時間数は、15時間49分) を一次資料とした。FSは、全員モナシュ大学日本研究科に在籍する初級から上級レベルまでの学生で、在日歴は1週間から39ヶ月間に及んでいた。一方NSは、データ収集の時点の滞在期間は、3週間から16年間であった。

タスク終了後、一次資料は速やかに文字化され、それを基に、不明な箇所の発話の確認、発話に伴うノンバーバルな行動の確認、ならびに、ディスコースの中で不適切な問題が現れた際に、どのような意識があったかを被験者に確認するために、被験者それぞれに30分から2時間のフォローアップ・インタビューを行い、そのデータを二次資料とした。とくに、本研究のように、自己調

整過程での発話行為を検証するためには、発話者の意識をこうした方法論が不可欠と考えられる。

5. 不適切マーカ

会話資料から自己マーク自己調整タイプの調整行動を抽出し、さらにフォローアップ・インタビューによる分析から、45例（FS：27例、NS：18例）の自己調整ディスコースが確認された。このディスコースを分析した結果、被験者が不適切さをマークするために、言いよどみ（hesitation）、確認チェック（confirmation checks）、説明（explanation）および入れ替え（replacement）という4種類の発話行動を行っていたことが確認された。それぞれのマーカは以下の通りである。

5.1 言いよどみ

前の発話と次にくる発話の間隔を埋めるポーズや、無声ポーズ、それに間投詞などの言いよどみは、会話の中で発話者が自身の発話を遮り、不適切さをマークするためのシグナルを出す自己調整過程と解釈できる。このマーカを、実際の調整ディスコースで検証してみる。

例 1³（ある日本人の友人の主人に関する会話）

1 FS: あの、ご主人（ん）は、ね うん 大丸の、あの、あの .. 大丸で働いていますけど。

（Miyazaki 1998 141 頁 例 2）

フォローアップ・インタビューの結果、FSが伝達しなかった情報は、日本人の友人のご主人が、メルボルンの大丸デパートで主任として働いているということであることがわかった。しかしながら、section chief の日本語の適語訳が見つからず、意図した内容が伝えられないことがわかり（不適切さを認識し）、発話の途中で内容を単純化したと報告した。このFSの自己調整の談話分析から、調整を試みる前に言いよどみ（「あの、あの」という間投詞）により、不適切さを現わしたと解釈できる。

5.2 確認チェック

このマーカは、発話者が伝達している情報がうまく伝わっているかどうか

³ 文字化で使われたシンボル

: ポーズ、(): 聞き手の相づちなどである

を確認するための機能をもっている。もし確認がうまく機能しない場合には、次の段階で調整をしようとする。このマーカ-の代表的な表現としては、「・・・という意味を知っていますか」などが挙げられる⁴。なお、本研究では、このマーカ-はNSの自己調整でのみ確認された。この不適切マーカ-を例2で確認してみる。

例 2 (NS 自身の趣味についての会話)

- 1 FS: あ、ウィンブルドンの季節は、毎晩徹夜です。あ、わかるかな。
徹夜、夜ずっと起きてる。で、衛星生中継でウィンブルドン見てる。
(Miyazaki 1998 142 頁 例 3)

このディスコースでは、NSの発話の「徹夜」という語彙に関して、FSが理解上の問題を起こしたのではないかと考え、発話の途中で確認チェックタイプの不適切マーカ-である、「わかるかな。」を用いた。本研究のデータからは、これ以外の類似表現として、「知っている?」、「・・・って言ってるんですが」などが確認された。

5.3 説明

あるフレーズが構文的に言い換えられたり、意味的に単純化あるいは修正される前には、「とゆうか」、「ってゆうか」、「または」、「あるいは」などといった表現がしばしば使われる⁵。「たとえば」は、前の表現が不十分であると評価し、次によりはっきりとした、あるいは追加説明を提供しようとするマーカ-であるし、接続表現の「とか」、「や」もこのカテゴリーに分類される語句である。このマーカ-に関して、本研究では、以下のようなディスコースが確認された。

例 3 (日本での買い物についての会話)

- 1 NS: 坂が、坂ってゆうか、山のちょっと上に住んでるんで。
(Miyazaki 1998 144 頁 例 4)

NSは、「坂が」を上昇イントネーションで発音した。これは、この語彙が、FSにとって理解するのが困難であろうと判断したことによる。そこで、NSは、「坂ってゆうか」という不適切マーカ-を使い、その後で、適切な調整をアレ

⁴ これは、Schiffirin (1987) が英語のディスコース・マーカ-で取り上げた「y'know」に近い機能であろう。

⁵ 英語では、I mean がこれに相当する表現である。前述の Schiffirin は、この表現の機能として、発話者自身の発話中の修正として、自身の調整に焦点を当てているところから、自己調整と見なすことができる (Schiffirin 1987: 299, 399)。

ンジした。

5.4 入れ替え

入れ替えマーカ―は、発話者が、そのマーカ―の前の部分の発話が不適切で正しい発話に入れ替えようと計画する場合に現れる表現である。このマーカ―は、前出(5.3)の説明(あるいは修正)マーカ―と異なり、発話者自身が不適切な発話と判断した場合に用いられる。例4で具体例を見てみる。

例 4

- 1 FS: devonshire tea は、えと、scones、scones 知ってる?、知ってる?
 (発話相手のNSが首を振る) scones、ええっと、ああ、ごはん(ん)あ、え(ん)違う、違う、ハン、パン、パン。
 (Miyazaki 1998 145 頁 例6)

FSは、NSが devonshire tea がどのようなものか知らないと判断し、確認タイプの不適切マーカ―として、「知ってる?、知ってる?」を使った。しかしながら、彼女が説明の際使用した語彙の「ごはん」が適当ではないと自己判断し、「違う、違う」というマーカ―で前述の語彙を言い直そうとした。FSは、フォローアップ・インタビューで、「間違った語彙を使った」という意味で、この言い換えのマーカ―を使ったと説明している。ただし、この入れ換えマーカ―の表現は、ソフトな表現ではないので、母語話者の場面ではあまり使われず、代わりに「じゃなくて」、「いえ」などが選択されるだろうと予想される。

以上検証したように、この研究では4種類の不適切マーカ―が確認された。次に、こうしたマーカ―の使用頻度について、以下の各グループには、どのような違いが見られるかについて調べてみる。

表 1 自己調整と不適切マーカ―

	初・中級 (%)	上級 (%)	NS (%)
言いよどみ	4 5 (90.0)	1 7 (94.4)	7 (46.7)
確認チェック	2 (4.0)	0 (0)	3 (20.0)
説明	1 (2.0)	1 (5.6)	5 (33.3)
入れ替え	2 (4.0)	0 (0)	0 (0)
	5 0 (100.0)	1 8 (100.0)	1 5 (99.9)

表1は、自己マーク自己調整のディスコースの中で確認された不適切マーカ―を、NSとFSの日本語能力別に分類したものである。この表から、FSとNSとは、不適切な問題のマークに特徴のある傾向が現れていることが読み取

れる。FSは、初・中級、上級レベルとも言いよみマーカ-の使用率がNSに比べかなり高い。対照的に、NSは、入れ替えを除いた他の3つのマークの使用率については、FSほど偏りがない。なお、不適切マーカ-のタイプと日本語能力のレベル(日本語学習者・母語話者)の二つの変数間に関連があるかどうかを検定するため、二つの変数は独立しているという帰無仮説を立て、どれぐらいの有意差が現れるかについてカイ二乗検定を行った。自由度(df)6において、カイ二乗値(χ^2)は24.2258となり、有意水準5%の場合、 $\Pr\{\chi^2 \geq 12.592\} = 0.05$ であるから、有意確率は $P0 = \Pr\{\chi^2 \geq 0.000597344\} < 0.05$ という結果になった。これにより、この帰無仮説は棄却され、不適切マーカ-のタイプと日本語能力レベルの変数は関連性があると結論付けられた。

6 FSの自己調整ストラテジー

ここまでは、自己調整ディスコースの中で、どのような不適切マーカ-が現れるかについて検証してきた。ここでは、そうした不適切マーカ-が現れた後、自己調整過程でどのような調整タイプが後続されるのかを検証する。本研究では、FSの調整ストラテジーとして3種類(説明(explanation)、語彙検索(word-search)ならびに複合調整の語彙検索・説明(word-search/explanation))が確認された。一方、NSは、説明タイプのストラテジーのみが確認された。この説明タイプには、語彙説明(lexical explanation)、構文修正(syntactic modification)、意味的修正(semantic modification)さらには転移(transfer)などのタイプが下位分類される。このタイプのストラテジーは、FSの自己調整の中でも、もっとも多く確認された。以下にその例を示す。

6.1 説明ストラテジー

例 5

- 1 FS: Australiaで、あの、ほかのメルボルンにいますか。あの例えばシドニーに。
- 2 NS: あ、あの、あの、す、あの、海外で住んだのはメルボルンが初めてで(はい)旅行にはシドニーとか(はい)えっとゴールドコーストとか、ま、(はい)行きました(はい)
(Miyazaki 1998 147頁 例7)

このディスコースで、FSは発話の途中で調整を試み、例(「例えばシドニーに」)を提示することにより自己調整した。ここでの適切なディスコースは、「オーストラリアでは、メルボルンの他に住んだことがありますか」という表現などが妥当であろう。これは、例示タイプの不適切マーカ-が現れた一例である。

例 6 (日本の月刊誌についての会話)

1 FS: ええっと、例えば、あの、70年代の、あの、croissant、日本では、croissant という、あの女性の仕事、仕事をしたい、する女性の向けの雑誌です。

2 NS: はい、クロワッサン。

(Miyazaki 1998 148 頁 例 8)

これは、上級レベルのFSによる、説明ストラテジーの一例で、雑誌が発刊された年代を提示することで、話題になっている雑誌がどのようなものかを説明している。FSの意図した発話は、「例えば、70年代の、あのクロワッサン」というように表現されるのが適切であろう。

6.2 語彙検索ストラテジー

語彙検索ストラテジーは、自己マーク他者調整タイプの調整ディスコースの中にも現れる。発話者が自分の発話の中で不適切な語彙(例えば不正確な語彙表現)をマークして、聞き手の調整を要求する場合(例えば、「日本語では、ハイラーキー(hierarchy)といいますか、ヒエラルキーですか?」のような表現)は他者調整になるが、自己マーク自己調整の場合には、発話者自身がディスコースを管理しようとする意識があるので、聞き手に対する明らかな調整要求の発話行為は確認されないのが普通である。次の例で検証してみる。

例 7 (オーストラリアの中央市場についての会話)

1 FS: でも、ここで、Um、Um、混んで、混んで、混んでいません。

(Miyazaki 1998 149 頁 例 9)

このディスコースの中で、FSは語彙の問題に遭遇し、その問題をマークした(Um、Um)後、適切な語彙表現(is not crowdedの日本語訳)を探すために自己調整を始めた。フォローアップ・インタビューで、FSは、彼女自身が適当な表現を探せると思い、特に聞き手であるNSに調整要求はしなかったと報告している。この場合、他者調整を求めた場合には、自己マーク他者調整として分類されるが、ここでは、結果的に発話者自身が調整に成功した例である。次の例でもう一度確認してみる。

例 8

1 FS: の、中には..閉め、閉める、閉め、閉ま、閉めます(笑い)

閉めます あ、だから、Um、水曜日と月曜日の外は、あの行ってほうがいいと思います。(Miyazaki 1998 149 頁 例 10)

この例は、例7と似たディスコースで、発話者自身(FS)が語彙(動詞)に不適切な個所があるとマークし、自己調整行動を行ったものである。例7と同じく、フォローアップ・インタビューの結果、FSは、自動詞を使うべきか他動詞を使うべきか自信がなかったため、どちらを使うべきか迷った結果、検索するための連続的な言い直し(自己調整)になったことが判明した。ここでは、「(市場は、月曜日と水曜日には)閉まります」、または、「閉まっています」といったような表現が適切であると判断できる。この例の中のFSのディスコースの中で確認されたポーズ(..)は、動詞の選択について、発話前にマークした(pre-articulatory level)ことを示しており、6度の言い直し(閉め、閉める・閉め・閉ま 閉めます、閉めます)は、発話後にマークした(post-articulatory level)ことを示している。

6.3 語彙検索・説明ストラテジー

このストラテジーは、2つの機能を有する複合タイプのストラテジーで、不適切とマークされた部分を繰り返し、さらにどのような語彙や表現を説明したかを説明しながら、適切な語彙を検索するストラテジーである。以下のディスコースで、このストラテジーについて検証してみる。

例 9

- 1 FS: あの、優秀な人からいつも他の人に対して、あの、英語で look down (ん) される (ん) ですね。look down される、例えば、ああ、わか、あ、あなたよりも、私、頭がいいし。(Miyazaki 1998 150 頁 例11)

このディスコースで、FSは不適切と判断した英語の語彙(look down)を繰り返すことによって、表出の問題があることを知らせている。次にFSは、意図する表現を日本語で言い換えて(「例えば、ああ、わか、あ、あなたよりも、私、頭がいいし」)、自己調整による問題解決を図ろうとしている。こうした解釈から、この組み合わせは、語彙検索・説明タイプの複合ストラテジーと分類できる。

以上、自己調整ディスコースで現れる、不適切マーカ―(言いよどみ、確認チェック、説明)と、それに続く調整タイプ(説明、語彙検索、語彙検索・説明)を検証してきた。不適切マーカ―については、表1で、能力別の傾向を検証したが、ここでは、自己調整タイプについて、同じく上級レベルのFSと初級レベルのFSを比較してみる。

表2 能力別自己調整タイプ

	初・中級 (%)	上級 (%)	NS (%)
説明	7 (50.0)	6 (46.2)	18 (100.0)
語彙検索	6 (42.9)	3 (23.1)	0
語彙検索・説明	1 (7.1)	4 (30.8)	0
全体	14 (100.0)	13 (100.0)	18 (100.0)

表2から、上級話者が使用する調整タイプにはあまり偏りが見られず、一般的に調整タイプを使っていることが分かる。一方、初級話者は、説明タイプ、語彙検索タイプに比べ、語彙検索・説明タイプの使用がほとんど見られない。このことから、上級話者に比べ、初級話者の使用する調整タイプのバリエーションは限定されていることが分かる。さらに、複合タイプの調整タイプの使用が少ないということは、複数のストラテジーを同時に使用して、問題を解決できないと解釈できる。表2についても、表1同様、自己調整タイプのストラテジーと日本語能力レベルの間の関連性の有無を検証してみた。二つの項目変数は独立しているという帰無仮説を立て、カイ二乗検定を行った。自由度 (df) 4の場合のカイ二乗値 (χ^2) は、 $\chi^2 = 18.268$ となり、有意水準 5%の場合、 $\Pr\{\chi^2 \geq 9.488\} = 0.05$ であるから、有意確率 $P_0 = \Pr\{\chi^2 \geq 0.000617839\} < 0.05$ となる。したがって、この帰無仮説は棄却され、自己調整タイプのストラテジーと日本語能力レベルの変数は関連性があると結論付けられた。

以上、不適切マーカ―及び自己調整ストラテジーの使用頻度の検証から、外国人学習者と日本語母語話者では、その使用タイプが異なることが分かった。この違いは、今後の自己マーク自己調整タイプの調整行動の習得を考える上で参考になるとと思われる。

7. 結論

本稿では、調整軌道のうちの自己マーク自己調整型に関して、FSおよびNSの自己調整ディスコースデータから、どのような不適切マーカ―現れるのか、さらにそれに続き、どのような調整ストラテジーが使われているのかを検証した。その結果、調整ディスコースの分析から、言いよどみ、確認チェック、説明および入れ替えの不適切マーカ―が現れることがわかり、その中で、FSには、言いよどみが多く見られ、NSは、それ以外のマーカ―を多く使うことが確認された。また、自己調整ストラテジーについては、FSは、説明、語彙検索、語彙検索・説明といったストラテジーを使うことがわかり、一方、NSは、説明ストラテジーのみ確認された。こうしたFSとNSの使用傾向の違いは、カイ二乗検定によっても実証され、日本語学習者がディスコースの中で習得のモデルとすべき、マーカ―と調整ストラテジーが明らかになった。こうした研

究結果を、習得研究に応用する場合、さらにデータを増やして、FS, NS双方のディスコースを詳細に検証していく必要がある。そのためには、発話者の自己調整過程を、より正確に検証できる方法論が不可欠である。

参考文献

- 宮崎里司 1998 「第二言語習得理論における調整、意味交渉及びインプット」、『紀要』、11号 早稲田大学日本語研究教育センター、177-190頁
- 宮崎里司 (近刊) 「第二言語習得とコミュニケーション調整モデル」、『日本語学の展開』、森田良行教授古希記念論文集、明治書院
- Chamot, A. and Kupper, L. 1989. "Learning strategies in foreign language instruction". Foreign Language Annals. Vol. 22. No.1. pp.13-24
- Day, R., N. Chenoweth, A. Chu and S. Luppescu. 1984. "Corrective feedback in native-nonnative discourse". Language Learning. vol.34. no.2. pp.19-45.
- Green, P. and K. Hecht. 1993. "Pupil self-correction in oral communication in English as a foreign language". System. vol. 21. pp.151-163
- Jefferson, G. 1972. "Side sequences". In D. Sudnow. (ed.). Studies in Social Interaction. New York: Free Press. pp.294-338.
- Juvonen, P. 1989. "Repair in second language instruction". Nordic Journal of Linguistics. Vol.12. pp.183-204.
- Kasper, G. 1985. "Repair in foreign language teaching". Studies in Second Language Acquisition. Vol.7. no.2. pp.200-215.
- Krashen, S.D. 1982. The Input Hypothesis: Issues and Implications. London: Longman.
- Levelt, W. 1985. "Monitoring and self-repair in speech". Cognition. Vol.14. pp.41-104
- Long, M. 1983. "Linguistic and conversational adjustments to non-native speakers". Studies in Second Language Acquisition. vol.5. no.2. pp.177-193.
- Miyazaki, S. 1998. Communicative adjustment between native speakers and non-native speakers of Japanese in contact situations. Unpublished Ph.D. thesis. Department of Japanese Studies. Monash University.
- Neustupny, J.V. 1995. Atarashii Nihongo Kyooiku no tame ni. Tokyo: Taishukan.
- Schwartz, J. 1980. "The negotiation for meaning: Repair in conversation between second language learners of English". In D. Larsen-Freeman. (ed.). Discourse Analysis in Second Language Research. Rowley, Mass.: Newbury House. pp.138-153.
- Schegloff, E.A., G. Jefferson and H.E. Sacks. 1977. "The preference for self-correction in the organization of repair in conversation". Language. vol.53. no.2. pp.361-382.
- Schiffrin, D. 1987. Discourse Markers. Cambridge: Cambridge University Press
- Varonis, E. and S. Gass. 1985. "Non-native/non-native conversations: A model for negotiation of meaning". Applied Linguistics. Vol. 6. No.1. pp.71-90.